

～ セピア色の風景 ～

「おかいこさん①」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

私の子どものころ、「おかいこさん」という言葉がありました。

今、あらためて調べると、こうありました。

「戦前まで、日本の農家の多くが養蚕をしていました。田畑の収入の他に、養蚕は現金収入につながる重要な副業だったのです。そのため『お蚕（かいこ）さん』と敬称をつけて呼ばれていました」。

私の子どものころ、おおむね昭和30年代後半から40年代前半は、わが家は稲作の農業と養蚕の兼業でした。

その養蚕は、稲作と時期が重複するため、常に忙しい家でした。「うちは忙しい家なんだから」のひと言で、常に「家族総動員令発令」です。

養蚕は、小さな蚕の幼虫から成虫、繭（まゆ）、その出荷までおおむね1カ月半の作

業でした。5月から、春蚕（はるこ）、夏蚕（なつこ）、初秋蚕（しよしゅうさん）、そして9月の晩秋蚕（ばんしゅうさん）と年4回、年によってはその後の晩秋蚕（ばんばんしゅうさん）まで年5回と、父母と祖父母の4人がひたすら働いていました。

稲作の総司令官は当然親父でしたが、養蚕の総司令官は祖母でした。田んぼの作業と、桑摘み作業の段取り調整を司令官同士でよくやっています。さらに祖母は、蚕の「寝る」「起きる」の様子を見てその成長段階の観察、温度管理などをまさに「寝ずの番」でしていました。しばしば、作業場のむしろの上で寝ていたことを覚えています。

私の子どものころには、さすがに無くなっていました。が、その前時代は母屋の居間

まで「おかいこさん」の寝床になっていた話をよく聞きました。それもそのはず、蚕はどんどん大きくなっていくので、併せてその寝床のスペースも必要になってくるのです。加えて、蚕の成長には結構高い室温が必要のため、涼しいあるいは寒い納屋ではだめで、居間になったようです。

作業場であった2階建ての養蚕室（子どものころは、「ヨウサンス」という固有名詞となっていた）には、その高い室温を保つため、1階には炉がきつてあり、2階は1階の暖気が入るよう床が開閉できるようになっていました。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める